

主題 国語Ⅰ・Ⅱにおける古典の指導

司会者 中泷 正堯 (兵庫教育大学)

提案者 世羅 博昭 (広島大学附属高校)

尾西 陽一 (大分県立竹田高校)

伊東 武雄 (広島県立高陽東高校)

「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」における古典指導

—— 生き生きとした古典教室の創造をめざして ——

世 羅 博 昭

はじめに

新学習指導要領に基づく高等学校「国語科」の授業が全国一斉に始まって、ことしで二年目になる。今、実践の場では、表現(作文)指導と並んで、総合的性格を持つ「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」にお

ける古典指導はいかにあるべきかが、大きな問題となっている。

本稿では、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の実践上の課題を明らかにした上で、今後の古典指導のあり方について、二つの提案をしたいと思う。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の実践上の課題

(1) 「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の目標は何か

実践の場では、毎日毎日の授業に追われて、何のために自分は古典の授業をしているのかを考えないでいることが多い。そこで、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導を行うにあたっては、まず、その目標を明確にとらえておくことが大切である。

新学習指導要領では、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の目標は具体的に記述されていない。中学校や高等学校「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」・「古典」の文面を通して推測するしかない。

中学校の「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の項には、

「古典の指導については、古典に対する関心を深め、古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること。」

とある。高等学校「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の目標は、

「国語を的確に理解し表現する能力を養う（高める）」とともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。（括弧内は「国語Ⅱ」の文面である。）

とあり、選択科目「古典」の目標は、

「古典としての古文と漢文を読解し鑑賞する能力を高め、ものの見方、感じ方、考え方を深めるとともに、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。」

とある。これらを踏まえると、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典

指導の目標は、

「古典としての古文を読解し鑑賞する基本的な能力を養い、ものの見方、感じ方、考え方を深めるとともに、古典に対する関心を深め、古典に親しむ態度を育てる。」「国語Ⅱ」では、「基本的な」を削除する。）

と考えて、間違ひなからう。

この目標は、細かく見ると、(A)読解し鑑賞する能力を養うという技能目標、(B)ものの見方、感じ方、考え方を深めるという価値目標、それに(C)関心を深め、態度を育てるという態度目標から成っている。これら三つの目標の相互関係は、(A)と(B)の目標がバランスよく達成されたときに(C)の態度が育ち、また、(C)の態度をもって古典を読んだときに(A)と(B)の目標がより達成されやすい、というようになっていいる。生涯教育の視点から、高等学校卒業後も折にふれて古典を読むような読書人を育てることを志向するならば、高等学校における古典指導の究極のねらいは、古典に対する関心を深め、古典に親しむ態度を育てるところにあると考えてよからう。もちろん、このねらいは、古典を読解し鑑賞する能力を養うことと、ものの見方、感じ方、考え方を深めることがバランスよく指導されたときに、はじめて達成されるのである。

したがって、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導では、古典を読解し鑑賞する（基本的な）能力を養うことと、ものの見方、感じ方、考え方を深めるとことをバランスよく指導して、学習者の古典に対する関心を深め、古典に親しむ態度を育てることがめざされなければならない。

(2) ① どんな実践上の課題があるか

学習者の古典に対する関心を深め、古典に親しむ態度を育てるために、指導内容や指導方法が学習者を意欲的に古典の学習に向かわせるものでなければならぬ。そのためには、どんな実践上の課題が考えられるか。とくに、次の三点を強調しておきたい。

① 技能主義に基づく古典指導の変革を

高等学校における古典の授業は、従来から厳しい批判を受け、古典教育無用論も声高に叫ばれている。最も厳しい批判を受けているのは、今までの古典の授業が、古典の読解技能を養うという名目のもとに、古典文法の知識を詰め込む指導や語釈・文法的説明・口語訳を繰り返す訓詁注釈の指導に偏っている点である。たしかに、古典を読み味わうためには文法指導や訓詁注釈の指導も必要であるに違いないが、あまりに度の過ぎたそれらの指導は、かえって古典への興味を失わせ、古典嫌いを生み出してしまふ。

そもそも、読解技能を養うのは古典を読み味わうための手段であつて、目的ではない。それが「大学受験のために」などの声のもとに、目的化してしまっている。これでは古典嫌が増えるのも当然である。

中学校における古典の授業では、ほとんど文法指導や訓詁注釈的指導はしないで、口語訳や脚注を手がかりに古典を読むという指導をしている。それで、けっこう、中学生を古典に親しませる授業ができてゐる。この中学校の指導を受けて、高等学校の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の授業では、古典嫌いをつくらないために、古典の読解技能を養うことに片寄つた古典指導を早急に改めなければならない。

② 指導内容の焦点化と総合化を

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」は、小・中・高の一貫性、学習者の発達段階や多様化の現実を考慮して、「中学国語」との関連を図り、内容も基礎的、基本的なものに精選することになつてゐる。また、

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の標準単位数は、それぞれ四単位である。(従前の「現代国語」と「古典Ⅰ乙」は二年間で、五単位ずつ、計十単位であつた。したがつて、二単位の減少である。) 古典は、四単位のうちの一・五単位の配当である。年間授業時数にして、五二・五時間、したがつて古文・漢文それぞれ約二十六時間。学校行事などを考えると、二十時間とればよい。教科書をみても、一学期に一単元しか古典の単元はない。このような限られた時間の中で、どのように指導内容を基礎的、基本的なものに精選することができるか。

このような条件のもとでは、古典は長い年月を超えて生きつづけてきた文化遺産であるから学ぶ価値があるという古典観に基づいて、文学史的に価値のある作品を丸ごと取り上げ、その作品のすばらしさや作者のもの見方、感じ方、考え方を浮き彫りにする指導はできない。何か、あるいはどこかに焦点を絞つた古典指導を考えるより方法がない。問題は、「何か」・「どこか」の具体的な内容である。「何か」とは、主題(テーマ)を何にするかである。「どこか」とは、一つの作品のどこを教材とするかである。一つの作品のどこを教材化するかという場合には、その箇所を持つテーマ性が問題となる。とすれば、結局、どんな主題(テーマ)を設定して、どんな教材化をするかが問題となる。学習者の興味・関心や問題意識を踏まえた主題を設定して、学習者にとって学習しがいのある古典の授

業を創造したいものである。

また、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」は、言語文化の連続性の視点から、従前の「現代国語」と古典に関する科目を合わせ含む総合的性格を持つ科目である。したがって、古典独自の単元だけでなく、現代文と古典の総合化を図った単元も考える必要がある。

③ 指導過程・指導方法を豊かで変化に富んだものに

今まで、古典の授業と言えば、一斉授業形態のもと、教師主導型で、本文の首読→語釈・文法的説明→口語訳→内容の読みとりといった指導過程をとるのが一般のようである。このような授業では、学習者は受動的にならざるを得ない。高校生も、小・中学生と同じようにマンネリ化を嫌う。学習者を意欲的・主体的にするためには、一斉授業ばかりでなく、個別学習やグループ学習をとり入れるとか、読解指導ばかりでなく、学習者の読みや感想を書いて、あるいは口頭で発表し合って各自の読みを深めていくとか、さまざまな工夫が考えられる。できれば、古典の読みの方法をも学ばせて、自力で古典を読んでいくことのできる力をつけさせたいものである。

長年の「現代国語」の指導で開拓してきた指導過程や指導方法を古典の授業にも導入して、古典の授業がマンネリ化しないようにしたい。

二 主題を軸とした古典の単元学習

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の実践上の課題として、三つの課題を挙げた。これらの課題にこたえて、古典の授業を生き生きとさせるためには、主題を軸とした古典の単元学習を行うのが

最も有効な方法である。

主題を軸とした古典の単元学習とは、学習者の興味・関心や問題意識を踏まえた主題（学習課題）を設定して、それに適したいくつかの古典教材を選んで単元を構成し、主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充をめざして、読むことを中心とした学習活動（「言語活動」を展開する）というものである。学習者の興味・関心や問題意識を踏まえた単元主題（学習課題）のもとに、問題追求型の学習を展開していくので、学習者は意欲的に学習に取り組むことができる。

このような学習指導を展開するには、どんな単元主題（学習課題）を設定するか、その主題（学習課題）のためにどんな教材を選び、どんな単元を構成するかという教材編成論の視角からの検討と、どんな指導過程や指導方法をとるかという単元展開論の視角からの検討が必要である。前者の教材編成のあり方については、すでに、広島大学教育学部国語教育学会誌「国語教育研究」第27号（57・8刊）で述べているので、簡単に要点のみを記し、単元展開のあり方に焦点を絞って論じていくことにする。

(1) 教材編成のあり方

① 単元主題の設定

学習者が自らの必要感から、自らある目的をもって何かを求めているときに、学習活動は活発となり、学習は主体的になるものである。したがって、単元主題の設定にあたっては、学習者にとって興味・関心や問題意識を踏まえた主題を設定し、その主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充を目指して古典を読むという立場に立っ

て、単元を構想していききたい。なお、学習者の興味・関心や問題意識を重視して単元主題を設定すると言っても、当然のことながら、教育的価値の高い主題が選ばなければならない。

② 単元編成のし方

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の総合的性格を生かして古典を核とした単元を編成すると、(A)古文だけの単元、(B)古文と漢文の総合化を図った単元、(C)古文と現代文の総合化を図った単元、(D)古文と現代文と漢文の総合化を図った単元などの諸単元を編成することができよう。

同じ主題のもとに古文と現代文の総合化を図る(C)型の単元の場合には、歴史的視点に立って両者を比較して読めるので、日本の文化や日本人のものの見方、感じ方、考え方の連続性(不易性)と非連続性(流行性)を明らかにすることができる。したがって、この学習を行うと、現在という時間を生きたる学習者が自己の歴史的位置を把握することができると同時に、日本文化創造の担い手として今後のあり方についても思いを巡らすことができるだろう。また、これに漢文を加えた(D)型の単元の場合には、古文と現代文の二つを読んだ場合に比べて、さらに漢文が加わるので、日本と中国との比較もでき、幅広い視野からその主題について考えを深めることができる。

(B)(C)(D)の単元は、総合的性格の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の趣旨に合った単元として、今後の開発が期待される。

③ 教材の選定

教材選定の条件を示せば、次の四点になろう。

(1) いずれの教材も、学習者の興味・関心や問題意識に即した教材であると同時に、教育的価値の高い教材であること。

(2) いずれの教材も、国語学力を育てるのに有効に機能する教材であること。

(3) 選んだ教材の量が学習者の実態に即して、無理がないこと。

(4) 選んだ教材が、単元主題に対する認識の深化・拡充を図るのに有効に機能し合う教材であること。

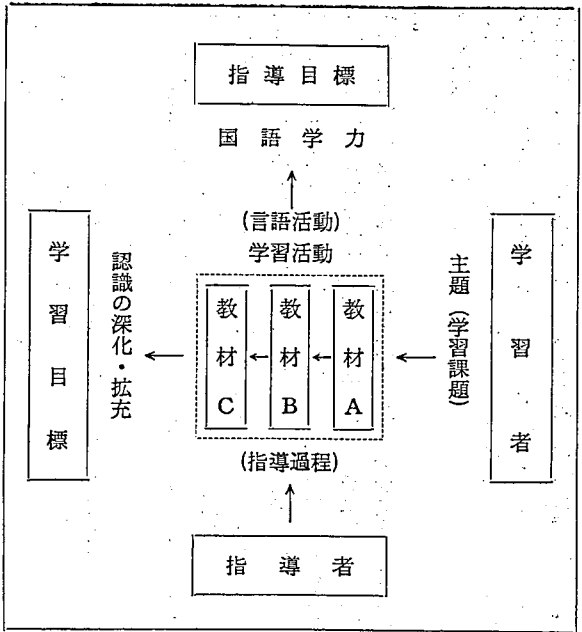
単元編成の立場から考えると、とくに(4)が大切で、教材が相互に有機的に機能し合う内容を持つ必要がある。核になる教材を決めて、それとの関係で他の教材を探す方法が実際的である。

(2) 単元展開のあり方

単元展開を考えるにあたっては、学習者を生き生きと意欲的に学習させることと国語学力を確実に身につけさせることが、それぞれできるように配慮しなければならない。

① 学習目標と指導目標の関係

学習者を生き生きと学習させるためには、学習者の目標、すなわち学習目標と、指導者の目標、すなわち指導目標とを同じにしないのがよい。主題を軸とした古典の単元学習においては、学習目標は主題(学習課題)に対する認識の深化・拡充であり、指導目標は学習者の展開する学習活動(「言語活動」)の中で国語学力を習得させることである、というようにするのである。この関係を図示すると、次のページの表のようになる。学習者は、あくまでも、興味・関心の高い主題(学習課題)に対する認識の深化・拡充を目指して学習活動を展開し、指導者は、その学習活動の中で古典の読解技能を中心



に、読む・書く・話す・聞く力をつけることをねらうのである。
 たとえば、指導者は学習者がある場面における登場人物の心理をとらえなければならぬ、そういう場を設定しておいて、学習者がある人物の心理をとらえるために、どうしても語句の意味や助詞・助動詞の働きを考えざるをえないように仕向ける。学習者の目標はその場における人物の心理をとらえることにあり、指導者の目標はその学習の過程で、文脈に即して語句の意味を読みとる力や、助詞

・助動詞の働きを明らかにすることによって人物の心理を深く読みとる力などをつけるところにあるのである。学習者には、今、古典の読解技能を身につけるために語句の意味や文法的分析をしているのだと思わせないことが肝要である。そう思わせただけで、古典の学習はおもしろくなくなる。

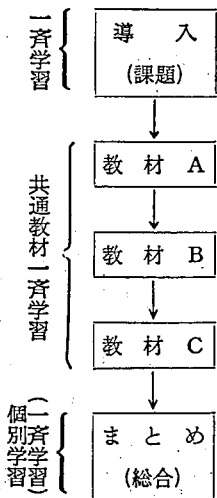
このような学習指導の展開を図るためには、教材研究を徹底し、どの教材のどの場面で、あるいはどんな指導の場で、どのような古典の読解技能を身につけさせるか、事前に見通しを立てておくことが大切である。

② 指導過程と指導方法

学習者が主体的に取り組み、自らの認識の深化・拡充を図るために、どんな指導過程が考えられるか。私が今までに実践したのは、次にあげる二通りの指導過程である。

I 単線型の指導過程をとるもの

この指導過程の特徴は、学習者全員が共通の教材を一斉学習形態をとって読んでいくところにある。



この型による単元の基本的な指導過程は、次のようになる。

I 導入（一斉学習）

・単元の主題（学習課題）を明らかにし、単元全体の授業構想をとらえる。

II 展開（共通教材による一斉学習）

・共通教材 A・B・C それぞれの読解を中心とした学習指導を展開する。この中でさまざまな言語技能を身につけさせる。

III まとめ（一斉学習・個別学習）

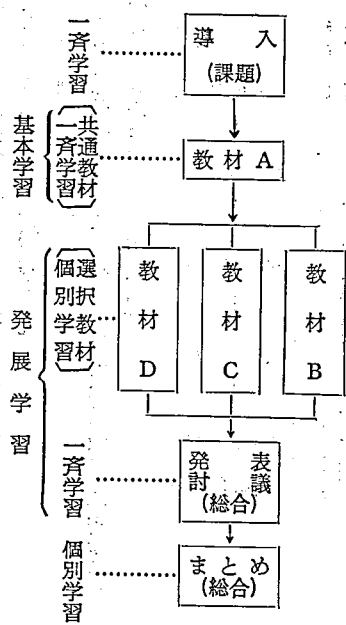
・教材 A・B・C を読み比べて、主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充の結果をまとめる。（↓文集に）

この指導過程によれば、「展開」の段階の指導では教材 A・B・C を別々に学習させ、「まとめ」の段階で A・B・C を読み比べて、主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充を図ることになる。これでは、単元全体を見通したときに教材 A・B・C を関連づける場が少ないので、教材 B を読む途中や読んだ後で、また、教材 C を読む途中でそれぞれ前に読んだ教材と関連づける場を設けて、主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充を図る機会を多くするとよい。

II 複線型の指導過程をとるもの

単線型の指導過程をとる場合には、「展開」の段階がすべて共通教材による一斉学習なので、学習者を真に主体的に学習させえない欠点がある。それを克服するために、次のような指導過程をとる。

この指導過程の特徴は、共通教材による一斉学習だけでなく、自選教材による個別学習を位置づけている点にある。



この型による単元の基本的な指導過程は、次のようになる。

I 導入（一斉学習）

・単元の主題（学習課題）を明らかにし、単元全体の授業構想をとらえる。

II 展開

(1) 基本学習（共通教材による一斉学習）

・単元の主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充を図るために教材 A を読む。内容を深く読みとるだけでなく、その読みの方法も学ぶ。

(2) 発展学習 I（自選教材による個別学習・グループ学習）

習)

・教材群(B・C・D...)の中から自分の興味・関心のある教材を一つ選び、単元の主題(学習課題)に対する認識の深化・拡充を図るために読む。基本学習で学んだ読みの方法を応用する。

(3) 発展学習Ⅱ(一斉学習)

・個別学習あるいはグループ学習でまとめた単元の主題(学習課題)に対する考えを発表し、討議する。これによって、学習者は教材B・C・Dの比べ読みができ、一段と単元の主題(学習課題)に対する認識の深化・拡充を図ることができる。

Ⅲ まとめ(個別学習)

・各自、学習し考えたことを書く。(↓文集に)

この指導過程では、各学習者は教材Aと自由選択教材一つ、計二教材を読んだ後、「発展学習Ⅱ」の段階で他の教材に関する発表を聞き、その内容について討議したり、各学習者の選んだ教材と比べて意見を述べたりする。その中で、単元の主題(学習課題)に対する認識の拡充・深化が図られる。その上に、「まとめ」の段階で単元全体の学習を通して考えたことを書くのである。学習者の認識はさらに深化・拡充できるのである。

この一連の指導においては、「基本学習」の段階で、内容を深く読みとる方法(Ⅱ単元主題に対する認識を深める方法)を学ばせておいて、次の「発展学習Ⅰ」の個別学習の段階でその方法を応用

させ、身につけさせていくこともねらっている。この内容を深く読みとる方法を学ばせたり、応用できるようにするためには、次のような「学習の手引き」を作る必要がある。すなわち、その「学習の手引き」は、たとえば人物像をとらえさせることをねらった場合であれば、その人物像をとらえるための柱になる大きな問題をいくつか作り、さらにそれぞれの柱に、その問題を解くための、必須のいくつかの小さな問題を解いていけば、自然に大きな問題が解けると同時に、問題解決の着眼点や方法も自然に理解されるように工夫した手引きである。

(3) 学習指導の実用例

今までに私が実践した主題を軸とした単元学習の中で、古典を核とした主な単元学習例を挙げると、次の表の通りである。(注)

単元名	単元編成	単元展開
「伊勢物語」の学習指導	古文だけの単元	単線型
「枕草子」の学習指導	古文だけの単元	複線型
「清少納言」の学習指導	古文だけの単元	複線型
「平家物語」の学習指導	古文だけの単元	複線型
「戦乱の世を生きる人の姿を見つめて」	現代文・古文・漢文の総合単元	単線型
単元「歴史—時代に生きる人々—」	現代文・古文・漢文の総合単元	単線型
単元「愛—別れと愛—」	現代文・古文・漢文の総合単元	単線型
単元「古代日本人の知恵—万葉仮名と漢文訓読法の発明—」	古文と漢文の総合単元	単線型

これらの実践例の中から、単元「歴史—時代に生きる人々—」の単元編成表と「平家物語」の学習指導の単元展開表とを紹介したい。

① 単元「歴史—時代に生きる人々—」の単元編成

指 導 計 画						単元名	
4	3	2	1		次	歴 史	
「私の祖父」 (宮本常一)	「長刀はむかしの鞘」 (井原西鶴)	「臥薪嘗胆」 (曾 先之)	「無名の人」 (司馬遼太郎)	單元設定の説明	教 材	時代に生きる人々	
単元のまとめ △四つの作品を読み終えてV						定旨	
表現・理解	理 解	理 解	理 解	理 解	領 域	歴史は人間によって作られ、人間は歴史の中で生きている。自分もその一人である。自分の生き方を充実させ、幸福な生活を送るために、過去の歴史・個人の歴史に学ぶことの意義の深さを理解させる。	
	現代文	古文	漢文	現代文	城		
	伝記	物語	史話	小説	時間		
1.5	3.5	4	3	2.5	0.5	学習目標(内容)	
四つの作品を読み終えて、感じ、考えたことを書く。	江戸末期から昭和初期にかけて生きた、農夫宮本市五郎の生涯を読み、「そのまま民話と言っているような人」となりをとらえる。	元禄時代を生きた最下層の町人の大晦日の越し方を読みとることによって、社会の底辺を必死で生きる人間の生き方を探る。	春秋時代の末期、三十余年にわたる呉越抗争の中で、国王としての夫差・句踐がどのように生きたかを読みとることによって、歴史を動かす力に気づく。	幕末動乱期に生きた、無名の志士・医師である所郁太郎の生き方を通して、「人を救うために人の世で生きる」ことの意義を読みとる。		学習目標(技能)	
・内容をまとめる。 ・各目の視点・立場を見定める。	・語句の意味・語感をとらえる。 ・文章の組立て・筋道をとらえる。	・人物の生活状況をとらえる。 ・作者の視点・立場を見定める。	・訓読のきまりに従って読む。 ・場面の展開に注意して読む。	・効果的な表現を理解する。 ・中心文をとらえる。			
長谷川	長谷川	世 羅	長谷川	長谷川	長谷川	指導者	
	教科書	「世間胸算用」 巻一の二 (傍注資料プリント)	「十八史略」 巻一 (傍注資料プリント)	教科書 (中学二年)		出典	
						対象	学年
						時間配当	15
							1

③ 「平家物語」の学習指導の単元展開

「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿を見つめて」という学習のテーマのもとに、「一の谷の合戦」場面を取り上げて、次のような教材化をした。

I 戦場において生きる男の姿

- 第一章 二度之懸……………河原兄弟・梶原景時父子
- 第二章 坂落……………源義経・佐原義連・武知清教・平盛俊
- 第三章 敦盛最期……………平敦盛・熊谷直実
- 第四章 重衡生捕……………平重衡・後藤兵衛盛長

- 第五章 知章最期……………平知章・平知盛
 - 第六章 越中前司最期……………平盛俊・猪俣則綱
 - 第七章 落足……………落ち行く平家の武士たち
- II 戦乱の世を生きる女の姿
- 第八章 小宰相の身投げ……………小宰相・乳母の女房

十六時間で終える予定であったが、実際には二十時間かかった。この学習指導の単元展開の型は複線型であるが、前掲のモデルと違うのは、「基本学習」の段階にモデル学習と練習学習を位置づけたところである。

第 2 次		第 1 次		指導段階	章	資料	学習の手引き	朗・読	学習形態	読み方	指導のねらい	時間
基本学習		導入										
① モデル学習												
②坂落	①二度之懸	小冊子 「一の谷の合戦」 (頭注あり)	小冊子 「一の谷の合戦」									
		手引き① 人物像をとらえる問題を出題										
		朗読 (四人) 群読① 「テープを聞く」										
		朗読 群読②										
一斉学習 通読	一斉学習 精読		一斉学習									
		①「学習の手引き」を活用して精読し、内容を深く読みとる方法を学ばせる。 ②戦場における河原兄弟の兄弟愛と小名ゆえの悲劇的な生き方、梶原父子の親子愛を読みとらせる。	①授業構想を理解させ、学習への構えを作らせる。 ②「一の谷の合戦」場面の状況をとらえさせる。									
1.5	4.5		1									

① 傍注資料を教材として、朗読(群読)を繰り返してあらずじをとらえさせるとともに、平家物語の文章のすばらし

第 3 次			第 2 次	
発 展 学 習			基 本 学 習	
④ 応 用 学 習 B		⑤ 応用学習A	③ 練習学習	
⑤ 知章最期	④ 重衡生捕	各自 自由選択	③ 敦盛最期	
右に同じ	〔担当班作成〕 傍注資料④	※応用学習 〔それぞれの 「傍注資料」 作成〕	※練習学習 傍注資料③ 傍注をつけ る所が空欄 にしてある	※モデル学 習
右に同じ	〔担当班作成〕 手引き④	〔それぞれの手 引き〕作成	手引き③ 手引き①よ りも問題が 少くしてあ る	
〔十人。割り ふり学習者〕 。群読③	朗読 二人	。	朗読 二人	〔平家源氏 方二人 源氏方 割り 二人 各指 導者〕
一斉学習	一斉学習	① 個別学習 ② グループ 学習	① 一斉学習 ② グループ 学習 〔担当班発 表・討議〕	
精読	通読	精読	精読	
① 父の身代わりになった知章と、わが子を見捨てて逃げた知盛、それぞれの生き方について考えさせる。	① 他の班の人物について学び、視野を拡大させる。 ② 盛長に焦点をあてて、極限状況下における人間の生き方について考えさせる。	各自が選んだ章の「傍注資料」を作る。その後で、同じ章を選んだ者同士のグループを作り、「傍注資料」・「学習の手引き」・「発表資料」を作らせる。	① 傍注資料の空欄を埋めることによつて、文脈を読みとる力をつけるとともに、「学習の手引き」を活用して内容を深く読みとる方法を練習を通して身につけさせる。 ② 敦盛と直実の、心理の変化・人物像をとらえさせる。	② 源氏方の勇敢さと平家方の愚劣さ、戦いの中における身分の低い武士の悲惨さをとらえさせる。
3	1	2	3	

第4次 まとめ		
	⑥越中前司 最期	右に同じ
「学習を終 えて」	⑦小宰相身 投	右に同じ
	朗読 二人	右に同じ
一斉学習	通読	①戦場を生き抜くための知略について考 えさせる。
一斉学習	通読	①小宰相の悲劇を通して戦いの悲惨さを 考えさせる。
一斉学習		他の人の感想を聞くことによって読みの 深化・拡充をはかり、感想文を書く中身 を育てさせる。
1		1
2		

おわりに

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における古典指導の実践上の課題を明らかにした上で、主題を軸とした古典の単元学習が、その課題解決のためにいかに有効であるか、また、その単元編成や単元展開はいかにあるべきかについて、具体的に述べてきた。

しかし、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」それぞれの年間指導計画の中にこのような単元をどのように位置づけるかについては、本稿では論じえなかった。広島大学附属中・高等学校「国語科研究紀要」第14号をぜひ参照されたい。また、中・高六か年を見通して、このような単元をどの学年にどのような形で位置づけるかについても、触れることができなかった。これについては、他日を期したい。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」は、スタートしたばかりである。その中における古典指導を学習者にとって意義あるものに行えるかどうかは、指導者の熱意にかかっている。多くの課題を一つずつ克服して、学習者が高校卒業後、古典を取り出して読むような、そういう授業

をぜひとも成立させたいものである。

(注) これらの単元学習の中で、「伊勢物語」・「枕草子」・「平家物語」の学習指導は、旧学習指導要領時代の実践である。詳しくは、それぞれ次の文献を参照されたい。

- ・「伊勢物語」の学習指導 (広島県高等学校国語教育研究会「年報」20号)
- ・「枕草子」の学習指導 (広島県立安古市高等学校「研究紀要」第三号)
- ・「平家物語」の学習指導 (広島大学教育学部光葉会「国語教育研究」第24号)
- ・単元「歴史」の学習指導 (広島大学附属中・高等学校「国語科研究紀要」第13号)
- ・単元「愛」の学習指導 (同右「国語科研究紀要」第14号)
- ・単元「古代日本人の知恵」の学習指導 (同右)

(広島大学附属高等学校教諭
現 長崎大学教育学部講師)